

氏名（本籍） キク チ ショウゴ 菊池省吾（東京都）
 学位の種類 博士（美術）
 学位記番号 博美第72号
 学位授与年月日 平成12年3月24日
 学位論文等題目 <作品> 水の記憶「場の交錯」
 <論文> 「場」が「もの」に与える必然性、「もの」が「場」に与える偶然性

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	助教授	（美術学部）	坂口寛敏
（論文第1副査）	“	教授	（ “ ）	越宏一
（作品第1副査）	“	“	（ “ ）	坂本一道
（副査）	“	“	（ “ ）	中西夏之
（ “ ）	“	助教授	（ “ ）	保科豊巳
（ “ ）	“	“	（ “ ）	渡辺好明

（論文内容の要旨）

この論文は、実技に基づく三部構成となっている。まず第一部では論文の対象となる作品を図録で紹介する。第二部では、その制作を裏付けた理論を展開し、これを本文とする。第三部では当時の制作ノートや資料をまとめ、それらと共に作品の解説を添える。

私はこれまで「水」が生命の根源的な要素であるということを前提に制作をしてきた。その作品を作る作業の中で「もの」が「場」にその存在を許されていくシステムを検証していくと、生命というものが「何？」という質問で答えられるような「物」ではなく、あるフラクタルな系を遂行している意志という形で見えてくる。しかし近年「物」に生命の宿る構造というものが、科学的な分子構造の違いによって区別できることを指摘されると、芸術作品は分類上、当然無生物ということになる。私は人間や物の存在理由という、それまで哲学の領域で語られてきた課題が、このように知識によって侵されていくことは、我々の持つ意識のバランスを崩す結果を招くことになるのではないかと考える。なぜなら科学は確かに事実を分析したかもしれないが、少なくとも今まで作品や「物」に生命感を感じる瞬間を体験した、私の意識も偽りのない事実だからである。この論文ではその自らの経験とそれに基づいた私の作品を紹介し考察することで、自然科学によって証明されている領域が哲学から分離して語られてしまう傾向に歯止めをかける。そして体験によって支えられている我々の無意識の感覚を見直すことで、自我と知識のバランスを保つことができたかと考えている。

その方法論として私は即物的な物質の奥にある形而上学的「存在」の概念を引き出し、この概念を裏付ける証拠として、自然科学の分野から幾つかの原理を引用する。その際用いる共通の尺度として、作品を通して検証される「もの」と「場」の間に働く必然的な相互作用を指摘し、そ

の定義をこの論文での目的とした。そしてその過程において分子構造によるものではない、万物に唯一遺伝している生命の「系」という構造から物質を大別できる見方を示唆し、それを美術の一つの形式として提案する。

第1章では自然界に存在する最小の原理をきっかけに、物の存在とは誕生と消滅のエネルギーが、相殺する際に生まれる安定状態期間であることを、物質の核融合反応や特殊相対性理論に基づいて考察する。実験では、大中小三つの大きさのフーセンを、内部の空気がそれぞれを自由に動けるようにつなげた場合、フーセンの大きさがどのように変化するかを観察し、その仕組みを検証することによって最小の原理を理論化する。その結果、物には力を伝える「場」が介在するということを制作結果から実証し、その「場」の中で発生する $(+1) + (-1)$ という力のバランスによって(力を相殺している)、 $=0$ という状態を保ちながら存在している(安定状態期間)作品を紹介する。

第2章では「無」から「有」への転移という、物が最初に誕生する際に起こった出来事を、ビッグバン理論やゆらぎ現象による相転移といった科学的法則に基づいて仮想する。この想像の域を越えられない事実を、水の三態変化や光合成による酸素の発生という、イメージを実行した現実と照らし合わせることによって、科学的原理が持つ我々の意識との距離を埋める。この照らし合わせる際に引用してきた数学的理念がフラクタル構造であり、この世界はどんなに小さな部分を切り抜いてきたとしても、常に全体を縮小した形をしているという自己相似性の関係を表わした理論である。その結果この宇宙の始まりである特異点のような存在も、私の作品の中で現れた一滴の水滴のような、相転移現象であったのではないかと予測する。またゆらぎ現象が起こる原因の分析が、無意識の導く意志という弱いリズム感の確認につながる。この弱い存在こそ生命感の遺伝情報であると考え、この意志の解釈を誤認した作品の検証を行い、その反省からこれがどのように作品に受け継がれるべき物なのかを法則化する。

第3章では第1章、第2章の中で引用してきた科学的原理が、既に肉眼で観測できる範囲を越えている事実であることから、作品にも見ることでできない事実を形にする能力が備わっているはずであると考え、これを分析する。本当の自分の顔を見たことがないという事実から、物質も含め自己を自覚するということは、他者に働きかけた結果返答される情報を読み取ることにより、脳内に形作られたイメージという偶像を見ることであると提案する。この時の「見る」という行為は、網膜経由の視覚ではないので映像とは区別されなくてはならない。そのため脳内には2つの映像現出装置があるといえる。脳内でこの二つの端子を切り替えているものこそ、見た物の見えない事実まで観測できてしまう能力を司る部分であり、鏡を認識する体験を例にあげ、それが記憶である事を推察する。その実験として自分が他者と関わった記憶をつなぎとめていくという作業を、自らの作品の中で実践した結果、この記憶が経験によって培われている物であることを証明する。最後に人間の宗教心が作り出す偶像崇拜に触れ、人間はたとえこの世に現存しない偶像に対しても、まるで存在しているかのように空間を提供できることを指摘し、それを今後の課題とする。

目 次

第一部

作品図録

第二部

制作理論

第1章 バランスが育む生命感

自然界の力の均衡 - 最小の原理 -

$(+1) + (-1) = 0$ で安定する「もの」

無生物の生命感

力を伝える「場」

第2章 相転移現象

「もの」と「場」を繰り返す自己相似図形（フラクタル）

ゆらぎ

一滴の水滴から…

遺伝の法則

相転移のフラクタル構造

第3章 映像と偶像

見ること

自分を知ること

脳内の2つの映像現出装置

経験の受信

「場」が偶像を作る

第三部

作品解説

* 資料及び制作ノート